目次

法華經より見たる現代思想（時言）……本多日生
王法佛法の冥合……本多日生
日本文化と外國關係……姉崎正治
實學（下）……山根日東
記事報道……
法華經要文講義……本多日生
那先比丘經通解……本多日生

第廿六年八月號

時言

法華經より見たる現代思想（承前）

本多日生

一八、破開同時

開顯主義とは活して來た所を云ふのてありますけれども、それは破開同時の開顯主義てあることは、是は天台を通ほし日蓮を通ほして法華經に來た者には、十分に諒解して居るべきことてあります。現に文句にはその事が精しく說いてある。所がその破開の問題に就て、日蓮宗ても涙が分れて居る。開し已つたならば何もかも一つてなければならぬ、開顯すれば凡夫も佛も何もかも同じてあると云ふのて、開の方に力を入れるものと、開顯しても勝劣の頭を忘れるなと云ふのて、破の方に力を入れるものとがある、さう云ふやうに、或は破に重きを置き、或は開に重きを置く爲めに、日蓮門下に於ても分裂を來たして爭ひ、今尙ほその思想が融合されて居らない。それはどちらが良いかと云ふ事は別個の問題てあるが、私共の觀る所ては、矢張破と云ふ

ものが少しても弛んでは駄目であると思ふ。現代の思想を觀ても、例へばデモクラシーの思想に於て、否定すべき側と活すべき側とある、その否定すべき側を見ないで、活すべき側のみを見て、之を採つたならば、必ず毒を持つて來るのである。であるから、どうしても警戒の手綱を弛めないやうにして、外來思想を捌いて行かなければならぬ。弊害のある時には、同時に破の方に力を入れて、いつも締め上げて行くことにしなければならぬ。

一九、日本天台の失敗

是は天台と日蓮の態度に於ても、天台は少し誤つて居る。日本の天台は、法華經に於てその破開の態度を開の方に置いたから、その中からして淨土宗出て禪宗が分れ、その中から色々なる宗派が分裂して、終に比叡山は法華宗か念佛宗か禪宗か譯が分らぬやうになつた、今日の天台は何が中心の信仰か分らない。開の方に餘りに包容寛大に過ぎたが爲めに、中心の法華經が、南無阿彌陀佛の爲めに蹂躙され、眞言や禪學の爲めに蹂躙されて、今日は殆んど勢力の無い宗派になつたのである。日蓮は玆に鑑みる所があつたから、開と云ふ事は法華經を見れば直ぐ出て來ることであるけれども、破の方面を弛めてはならぬと云ふので、誤れるものを折伏して、開顯して行つたのであります。今日吾々が思想を扱ふ上に於ても、この日蓮の態度を學ばなければならぬと思ふ。

二〇、外來思想の破開

それは法華經から觀て他の思想を捌くばかりを云ふのでなくして、日本の文明と西洋の文明との關係を見る場合に、同じく開顯の思想を以て觀なければならぬ、さうしてそこに破と云ふことを忘れてはならぬ、近來同化主義とか、或は世界思潮に順應しなければならぬとか、新思潮を受け容れなければならぬと云つて居るが、その場合に於ても、矢張その思想を捌くに就て透明を缺いて居る。同化と云ふ事はどう云ふ意味か、無闇に同化せよと言つて見た所が、それは漠然とした話である。明かに、この點は良くない、この點は宜しい、是は斯う云ふ具合にしたら同化すると云つて、思想を同化しようと云ふに就ては、十分にその思想を捌いて示さなければならぬ、それでなければ同化しない。この思想はこの點を破すべく、この點を活かすべしと云ふ事には、一々破開の作用が活躍しなければならぬ。それをさうでなく、今度の思想戰に於ても、時日を經過したならば、いつとなしに良いものは採り、惡いものは捨てられると云ふ風に考へて居つたならば、實に國を誤るものである。又一方には新思潮と云つて、一概に外來の思想を崇拜して、自分の國の事は忘れて居る。それ故に、新思潮とか同化と云ふよりは、破開の態度を以て、之を國民が思想を批判する最大要件として行かなければならぬ。斯う云ふ事は法華經に於ては頗る明晰に示されて居るのでありまして、思想を捌いて行く主義方針の中には、これ程明瞭なものは無いと思ひます。

二一、開顯以後の權實

現代思想の捌き方を、色々雜誌や新聞や書物に云つて居つても、それは批判と云ふやうな事を云ふのでなくして、法華經に於ては爲實施權、開權顯實、廢權立實

と云ふことを云つて、破開同時と說くのてあります。それから又開顯以後の權實と云つて、開し了つても矢張そこに體內の權實と云ふことがある。是は實に愉快な思想てあります。朝鮮は日本に併合せられて日本の治下にあるのて、今や朝鮮てはなく日本てある、既に日本に併合せられて體內のものてあるけれども、若し朝鮮人が、朝鮮と日本とは對等のものにならなければならぬとか云つて、問題にした時分には、それは矢張日本が朝鮮を支配すると云ふ立場を明かにしなければならぬ。日本の統一の下にある時に於ては、敢て朝鮮として之を別個の扱ひを爲すべきものてはない、何處までも公平無私に、同一の待遇を爲し、同一の權利を與へて行くべきものてありますけれども、その朝鮮人が假政府を作つて、獨立をすると云ふやうな事が起るならば、直ちに日本は之に對して、統率の作用をその瞬間に起すべきものてある。その場合には相當の制裁を加へなければならぬ。思想も矢張その通りてありまして、例へばデモクラシイの思想が、日本的となつて、在來の國民道德と融合し、國體と融合するならばそれは宜しいが、その本性を現して來て、デモクラシイーとは斯う云ふものてある、と云ふやうな事を云ひ出す時に於ては、直ちに膺懲することを忘れてはならぬ。一ぱい飲んて伸直りをしたからと云つて安心して居つて惑されるやうなことがあつてはいかない。その警戒の網を離さないやうにして行かなければならぬ。この體內の權實と云ふは、法華經に於て一切の權實を開顯し了つて後の權實で、第二十三の藥王品に、衆星の中の月の如く、諸水の中の海の如く、衆山の中の須彌山の如く、法華經も亦是の如しとあつて、開顯以後に於ても須彌山てあり、月の光てあり、大海てあると云つて、その差別を示して居る。「凡て物を批判する時にはその方針と歸趨を明かにして來なければならぬのてある、この點が非常に大事て、內容に這入つて研究するのは、難かしいやうてあるけれども、その態度が已に定まつたならば、大體、問題は解決の緒に就くのてある。態度が定まつて居なければ、內容に這入つても方向が分らない。今の學者先生達の論ずる所は、詳細の研究を積みつゝあるに拘らず、その批判が多く誤まつて來るのは、それは何故てあるか、學識は豐富てあらうが、思想を扱ふ主義方針が確立しなかつたが爲めに、その弊害に陷つたものてある。

二二、世法佛法の貫串

そこて更に一つ內容に這入つて考へて見たいと思ふ。それは、第一、法華經に於ては一乘の敎と云ふことを標榜して居る。その一乘は、佛敎の內部に於て、說去り說來つた所の思想を開顯統一をするのは勿論てあるけれども、單に佛敎內部の敎義を開顯統一するのが一乘の本義てはない。元來一乘と云ふは、世法と佛法とに就て統一を宣言する言葉てある。日蓮聖人は「天晴ぬれば地明かなり、法華を識る者は世法を得べきか」と云つて居られるが、この世法佛法の一貫した大理想の所に、一乘の敎旨があるのてある。この一乘の思想は、是が佛敎內部に這入つて行くならば、人々の本體に就ても、宇宙の眞理に就ても、又道德の根元に就ても、統一主義を示して來るのてありますけれども、さう云ふ色々の方面の事は姑く措いて、先づ所謂世間と云ひ佛法と云ふのは

どう云ふものであるかと云ふと、この二つは創造二つにする必要は無い、佛法と云ふものが別にあるのではない。西洋の歴史のやうに、國家の組織の外に羅馬法王なるものがあつて、そうして國家と教會との間に平和條約を結ぶと云ふ事であるならば、それは二つと云ひ得るのである。けれども、元來東洋に於ける佛教は國家の外に獨立したものでもなければ反對するものでもない。之を二つと云ふならば、所謂世間と商賣、世間と學校と云ふやうなもので、學校と世間とは何等別なものではない、商賣と世間とは別なものでないと云ふやうに、世間と佛法とは別なものではない。然るにその思想が消化しない爲めに、多數の佛教徒が、世間と云ふものと懸離れてしまつて、實際生活には非常に迂遠なるものとなつた、又世間で云ふ所の文明は、高遠なる宗教を捨てゝしまつて、唯物思想の下に、淺薄なる思想に依つて文明を形造つて行かうとする態度は、是は、單に現代の思想問題と云ふばかりでない、長き文明の觀念に就て、革正を要する點である。

二三、改造の意義

若し改造論を唱ふるならば、先づ第一に斯の如き根本觀念に就て改造を要すると思ふ。何故かと言へば、政治と云ひ產業と云ひ、教育と云ひ軍備と云ひ、種々の事柄が前きに言つた、大理想から離れた時には、それは罪惡である。理想無き政治、理想なき產業、理想なき教育、理想なき軍備、是は罪惡であるかも分らない、そこに世間と云ふものに缺陷のあることが分るのである。佛教と云ふものも、今のやうに葬式をやるとか法事をやるとか、山寺に引つ籠つて念佛を唱へて居ると云ふ事であつたならば、是れ亦どうも大した價値のあるものではない。近來東京の瓦斯會社の工場で職工の爲めに講演をして居りますが、その瓦斯會社の方から依頼に來られた人の話に、或る所に行つて、精神修養の講話をば誰に依頼したら宜からうかと云ふ相談をした所が、統一閣の本多師が宜からうと云ふ推薦を受けたのである。けれども坊さんと云ふものは葬式の導師や法事に出て來て油揚を食ふ位で、この世間の事には關係のないものであると思ふて居た、それを推薦するのは隨分不思議な事であると思つた、けれどもさう言はれたものであるから、一つ行つて聽いて見ようと思つて統一閣の講演を聽きに來て、私の講演を聽いて行つたのである。さうして、はてな、妙な坊さんもあるものだと思つた、會社の協議を經て遂に私の所へ依頼に來られたのであつた。それが如何にも適切な話で、感心したと云つて、今更らの如く不思議な顔をして私共に色々事情を話して居られた。是は餘程大きな事柄であらうと思ふ。佛教徒が相當なる人からして、實社會と關係の無いものと思はれて居る、何か實社會に直接關係のあるやうな事を話をすると、それが不思議な風に言はれる程になつたことは、是は全く佛教を習ひそこなふて居るのである。坊主が睡つて居つただけなら、坊主が惡いと言つてそれで濟むのである。その代りに、他の宗教の宣傳なり何なりて世間が開發されて居つたならば、坊主が睡つて居つたのは何も驚くに足らぬけれども、兎に角も宗教が坊主に托せられて居つて、その托された坊主が睡つて居る。それは坊主が睡つて居るのではない、實は國民全體が睡つて居るのである。坊主

を睡らして置くのは、一般國民も同じやうに睡つて居つたからである。

二四、宗教の復活運動

この事は今日の大問題である。勞働問題がどうだ、何がどうだと云つても、それは末の話である。勞働者に宗教の觀念が全く滅びて居つたならば、如何なる經濟組織、如何なる法制を設けても、決して善良に向ふべきものではない。資本家の頭に何等宗教の觀念が無かつた時には、如何に工場法があつてやかましく云つても、資本家の飽くなき欲望の爲めに、種々面倒な問題を惹起して、到底意義ある解決は附かぬのである。政治上に於てもさうである。表面は非常に立派であつても、一歩その内面に立入つて見たならば、常に情實の爲めの政治が行はれて、露骨なる政權爭奪の爲めに弊害に陷る。個人々々としては或は立派なる政治家もありませうけれども、政黨運動の中心はそこに置かれて居る。是れ皆理想が枯れ信念が涸れて斯樣なことになつたのである。故に世間の缺陷は、所謂佛教の思想を缺いて居るより起るのである。佛教の思想を失ふ時即ち一面には高き道德とか淸き宗教の信念を失ひ、人の根柢ある哲學的の觀念を失ふことになる。その中に於て何を論じて見た所が、元と々々その據る所の道德の軌範を離れ、守るべき宗教の信念を失ひ、正すべき哲學の觀念を缺いて居る政治や經濟に依つて、何の光を見出すことが出來ようか。さうしてそれ以下の事を問題だと云つて騷いでも駄目である。實に本末を顚倒して居るものと云はなければならぬ。その失敗が法華經の一乘の教に依つて警醒せられるのである。

二五、充足世間

法華經の一乘の教に依つて人生に現れる總ての文明現象は導かれなければならぬと云ふは、佛は「我が此の法印は世間を充足す」と云はれて居る。釋迦の法印なるものは、所謂實相の法印、妙法の法印であつて、その大なるや、宇宙の眞理に稽へ、又之を因果の大規律、所謂道德の大規律に稽へ、又宗教の大教義に稽へて、さうして根柢を築いて、而も世間を充たし、世間を安ぜんとせらるるのである。この大思想を戴かずして、法制や經濟のみに流れて、この偉大なる教を唱るやうな平凡なる人が多くなつた時には、到底思想問題に善良なる解決を見ることは出來ない。

二六、平凡と慢心

今は餘りに平凡なる知識を誇り過ぎて居る、又餘りに暗愚にして慢心し過ぎて居る。僅なる見聞に誇つて、そうしてその誤まつたる智慧を以て大事を解決しようとするから、言ふ事も言ふ事も皆桁を外れるのである。議政壇上に於いて言つて居ることも、高き見識から見れば殆んど言ふに足らぬやうな事である。力を入れなければならぬ所に力を入れて居らない。今や人心は墮落し、高潔なる精神を失つて居る。この場合に於て、何を言つて見た所が駄目である。人心が墮落して居る時には、正しい議論ありと雖も顧みる者は無い。

二七、先決問題

この人心の墮落を如何にして覺醒するかと云ふが、先決問題である。是が出來なければ何を言つても駄目である。勞働者が、人格を尊重せよと言ふ。成程人格を尊重することは大事であるに違ひない、けれども今日は、人格を尊重しろと言ふ人はあつても、自己の人格を修養し、且つ他の人格を尊重する人が少ない。斯う云ふことでは何を言つても分るまい。それ故に、斯の如く人心の頽廢に向つて居る時には、政治家にしても餘程しつかりした觀念から政策を立てなければならぬのである。今日のやうに、議會に於て多數を占めたからそれで宜いとか、又そこに於て論ぜられる大なる問題と云ふは普通選擧法案であるが、これも實は枝葉の問題である。今やそれ以上の大きな同題が急迫して居る。今日に於てはその大きな同題に就て心配せんければならぬ。今日は人心は頽廢の極に達して居る。之を蓋らすに就ては、區々たる議論學說は何の役にも立たない、どうしても吾々は、宗教的に目覺めて、大懺悔をしなければ駄目であると思ふ。文部大臣の如きは、何を爲しつゝありや、黨派の事が忙しいとか何とか言つて、番頭小僧のやるやうな事よりやらない、一國の大臣として大切なる事には力を盡さない。又政治家に就て彼等の實驗談を聞いて見たならば、文明の大理想を發揮しようと云ふやうな事に就て、力を入れた事があるか無いか。正直なる懺悔を聞いて見ると、現れて來る問題も現れて來る問題も、何れも皆俗臭紛々、愚劣なる問題のみて、日も亦足らずてあると云ふ。是は現代文明の大失敗ではあるまいか。一國の大臣と雖も、一箇月に一日や二日は、端坐して大なる思想を養つて、所謂摩訶止觀をやらなければならぬ。所が彼等は小止觀だも持たないのてある。

二八、自他の大懺悔

今日の文明は餘りに物質主義現實主義に流れて居る。宗教と道德の一致して居る高き理想を根本觀念に打立てゝ、この文明を訂正することに目覺めて行かなければならぬ。又十七萬の佛教徒は、舊來の分派の小さな事情を顧る必要は無い。その一々の宗派に對して批判をすれば言ふべき事は幾らてもあるが、今日はその時間も無く、又宗派の攻擊論に聞えるからやらないが、餘程是は目覺めなければならぬ。佛教の教義の宣傳に就ても、又佛教徒の態度に就ても、今や大いに目覺めなければならぬ秋てある。その標準は何處に置くか。法華經の教義に重きを置かなければならぬ。或はそれは、日蓮に降服したやうて面白くないと思ふか知らぬが、兎に角佛教徒は、釋迦の遺法を繼いて居るのてあるから、この釋迦が本懷の經として說いた法華經に導かれて、即ち一乘開顯の思想に導かれて、もつと實社會に適切なる教化を執らなければならぬ。時代の變遷を考へたならば、己れの行くべき道は明かてある。今や明治も過ぎ大正も十一年となつた。明治の最初に於ては間誤つて居つたのは無理もないけれども、その後の世の變遷に連れて、睡つて居つた者は覺め覺めた者は奮起しなければならぬ。今も同じやうにぼんやりして居つてはならぬ。

二九、佛教の活用

山寺に蟄居したり、人の居らぬ處に引つ込むやうな事では駄目である。どうぞ實社會に活動するやう

に佛徒が目覺めて貰ひたいと思ふ。それが法華經の思想である。日蓮も法華經の思想に導かれてその通りを行つたので、法華經の理想する所がそこに在るのであるから、それに基いて襲擬を加へたのであります。日蓮は、高き理想を提げて、一方には時の政治家を誡め、一方には國民を誡めて、立正安國の精神に基いて、汝等覺めよと云つて居る。この事は矢張今日に於ても同じてある、法華經も當時の法華經てある、國情は變遷しても人心の頽廢したる點に於ては同じてある、昔の北條氏も今の政治家も、そこに何も大きな違ひは無い。是は法華經の行者たる日蓮主義者の心を合せて絶叫すべき點てあらうと思ふ

三〇、西洋最近の大經綸

この事は年と共に實現せられて參るので、西洋の近來の事情を調査して歸つた人の報告を見ても、先づ大經綸家の着眼したのは宗教信仰の復活運動てある。その他日本に於ても、具眼者はこの點に異議を狹む者は無いのてある。けれども未だその仕事に熱誠を缺いて居るから、吾々日蓮の流れを汲む者は、一歩先んじたる者となつて、國民に警告を與へなければならぬ。兎に角にも、如何なる職業に從事する者も一乘主義の觀念を持つて、法華經の高き信仰に來つて、完全なる文明を形造るやうに、活動しなければならぬと思ふ。

三一、結論

先づ斯う云ふやうな種々なる點から、部分々々の問題を捉へて觀察して見たら宜しからうと思ふ。私は大體斯う云ふ觀念を以て今の時代に持て囃されて居る所の思想、即ち勞働問題とかデモクラシーの思想とか云ふやうなものを捌いて行きたいと思ふ。勞働問題がどうだとか、デモクラシーがどうだとか云ふが、勿論善い所もあるが惡い所もある、どうも餘りにさう云ふ事に熱中して文明の根本理想を忘れ、國家の大理想を忘れて居るものに對しては、私は之を双非したいと思ふ。國民が左樣な事に熱中して居る間に、人心は日に月に墮落し、文明の進歩は硬塞され、日本の地位は危くなつて來るのてはないか。もう少し大きく心しなければならぬと思ふ。日本が今日如何なる地位に置かれて居るかと云ふ事を考へ、思想は如何なる方向を辿りつゝあるかを双非し双照して、さうして一乘主義の文明の建設に努力しなければならぬと思ふ。

餘り私の考は全體的のやうてありますけれども、元來法華經の思想と云ふものは、左樣な全體的な所に特色があるので、部分々々の問題に這入つても、開顯の思想を及ぼせば、如何なる思想に就ても採るべき所があり、多少良い所があるので、吟味して行けば自ら明かになつて來るのてある。今申しましたやうな、思想を考察し批判する所の準備、又それを捌いて行く所の主義方針即ち一乘主義を確立する事が、私は、非常に大切てあらうと思ふ。故に思想取捨の態度と方針に就て聊か御參考に供した譯てあります。

（完）

王法佛法の冥合

本多日生

一、緒言　二、講題の意義　三、根本の一致と施設の協力　四、文化の精神的要素　五、宗教の地位　六、宗教に進せざる哲學　七、宗教を排斥する道德　八、宗教に來らざる文藝　九、人生生活と宗教　一〇、命の借り物　一一、精神生活の中軸　一二、過去の文明と宗教　一三、理想的文明の建設　一四、佛教の本質的研究　一五、釋尊と轉輪聖王　一六、勝義諦と世俗諦　一七、佛教の調節的精神　一八、結論

一、緒言

今日は憲法發布記念講演會でありまして、政治に關する講演をせねばならぬのであるが、教育に於て國民を調練し、教化を盛んにして民心を陶冶しなければ、政治の目的を達する事は、斷じて出來ないと思ふ。綱紀を萬世に維持するものは明教である。政治は明教と相俟つて始めて其效果を全うし得るのである。國民の政治思想を指導するには明教が伴はなければ如何に完全なる憲法を布いても、決して其社會を理想的に進むる事は出來ない。之は文明に關する根本問題である、政治であるとか教育であるとか宗教であるとか云ふものに就て、深く考慮を進めて行くならば、王法佛法の關係が頗る重要な意義を持つのである。今日憲法發布記念日に於て、この講題を掲げて講演する機會を與へられた事を、私は有り難く考へて居るのであります。實は佛教と政道と云ふやうな題で話して呉れんかと云ふ事でありましたが、それは清明會其他の講演會で二回に亘つて御話を申上げた事もあるから、同一演題の下に御話する事は避けたいと思ふて御斷りしました、私は私の佛教に對する見解を申上げて、「予の佛教觀」の題下にお話する事を許して貰ひたいと、願ひましたが、其願は聽屆けにならなかつたのである。政治に關聯して申述べる事は甚だ困難に感ずるのでありますが、自分の信ずる所を申上げて諸君の御批判を仰ぎたいと思ふ。

二、講題の意義

王法と云ふは王道と云ふも同じ事であります、王道と云ふは善良なる政治を行ふと云ふだけではない、王道の中には政治もあり、德教もあり、又殖産興業もあり、社會政策もある、是等の總てが理想的に行はるゝのを、王道と申して居るのである。眞觀政要の中に王道の辨と云ふのがありますが、それを見ますと政治も道德も經濟も、實際生活の全部に對して、善良なる施設を行ふて、始めて王道と稱して居るのであります。それ故に今日の分り易い言葉にしますれば、一般の善良なる文明的施設、それが王法と云ふ事であります。佛法と云ふは釋迦が開いたものであります けれども、其教の內容はどんなも

のであるか、それは澤山の御經があるから見れば分るが、中々むつかしい、想像的の觀察は澤山あるけれども、それは殆んど全部間違つて居る、眞實に佛法を見るのは餘程困難な事であります、が兎に角釋迦如來が說いて、さうして我國にも七千餘卷の經卷となつて來て居る、其中に在る事は一般の善良なる文明的の要素或は施設を包含して居る、それ故に王法と佛法とが冥合するか否か、冥合と云ふのは巧妙なる意味合に於て一致する事を言ふのである、迎合とか曲會とかに因つて引附けたのでは、冥と云ふ字は出て來ない、何處で繼合はしたか分らぬ、例へば金と金とを合して、其合した繼目が幾ら能く見ても分らぬと云ふのが、此冥の字の意義である、即ちそこ迄巧妙に双力が合致し融合調節されて、何んとも言ひやうのない有樣になつて居るのを、歎美して冥合と云ふのである。併し之を明かにするに就ては問題を分解して考へないと分るまいと思ふのであります。

三、根本の一致と施設の協力

假りに私は斯う云ふ風な事から論じて行つたら宜からうと思ふ、大體根本の理由としては佛教と他の文明的要素との關係、それから實際の問題に移つては佛教と他の文明的施設との協力此二つの事が融合一致するのを冥合と言つて居る、根本に於て離す可からざる關係を有し、實際の施設に於ても協力しなければならぬと云ふ意味を示して居るものが、本題の意味であらうと思ふ。そこで其原由の方より進めて第二に協力すべき必要を申上げやうと考へるのであります。

四、文化の精神的要素

王法佛法の冥合は神道や儒教などでは分りませぬ、之は餘程深遠な意味から起つて居る思想であります、で文明の要素は區分すれば色々ありますけれども、先づ精神的の要素と物質的の要素との二つに分けて申上げやうと思ふ、之は今日の人が一般に申す事でありまして、其精神的要素の中に於て宗教は最も優秀なる地位を占めて居るものと見なければならぬ、學問或は道德、或は文藝或は其他樣々の精神的文化がありませうけれども、主なるものは學問に依つて眞理を明かにする事、道德に依つて善を行ふ事、文藝に依つて快感を得せしむる事、之れが吾々の理智の滿足、意思の滿足、感情の滿足を得て行く所の土臺となるものである。人類の有する文化の中には學問を不必要とし道德を全然無視し、或は文藝を全然排斥する事の出來ないものであつて、それには盛衰はあらうけれども、必ずや此學問道德文藝と云ふものは、何時の時代にもその必要の消滅するものでない。さうして一方には宗教と云ふものが精神文化の中に行はれて來て居るものであります。

五、宗教の地位

所が宗教はそれ等の要素の一部分であるかと云ふと、さうでない、若し一部分であるならば、此冥合と云ふ問題は起らぬ、宗教は眞理の極處に於て、哲學の歸結に於て、其所に關係を有つて居るのであり、又道德に就ては善の極致に於て宗教は關係を有つものであり、又文藝の幽微に達したる所に宗教は關係を有つものである、薄べらな學問、薄べらな道德や

藝術を遣つて居るゞには、宗教は要らぬやうに思はるゝけれども、學問が深遠となり、哲學の奥に這入つて行けば、必ずや宗教と一致するものてある、道德も矢張さうてあつて、薄べらな道德ならば宗教を無視しても宜いが、鞏固なる根柢を有し、さうして片寄らない道德てあつたならば、宗教を無視する事は出來ない、文藝などても宗教は要らぬと思ふて遣つて居るのは、へつぽこ文藝てある、へつぽこの間は孤立する事が出來るが、それが段々と奥に這入つて行くと、宗教より分離する事は出來ない、私はさう考へるのてさる。

六、宗教に達せざる哲學

そこて宗教に達せざるの哲學は乾燥無味なものてあり、宗教を認め得ない程度の哲學てあつたならば、それは矢張物質文明に墜落するものてある、哲學が宗教に迄來ないて、途中て魔胡附いて居つたならば、それは、何處へ行くかと云ふと、物質文明の巷に彷徨するの外はない、哲學と云ふと氣が利いて居るやうてあるけれども、宗教に迄來なければ、哲學は獨立する事は出來ない、それが證據には今日實證哲學が科學に降服した結果は、滔々として物質文明の奴隷となり、物質生活の走狗となつて行きつゝあるてはないか。之は大いに考へなければならぬ事てある、理窟は偉さうてあるけれども、遂には唯物主義に降服しなければならぬ譯てある、それ故に哲學が段々妙處に這入つて誤たない眞理を握つたとするならば、宇宙間に大生命を認識し、更に大生命の意義を進めて、宗教的の信仰と一致せざるを得ない事になるてあらう。其所迄行かなければ、必ずや物質的に偏傾したる文明の提灯持ちになつて仕舞ふてあらう、さうして何の役にも立たない、畢竟豚を叩き殺して煮て食ふ手合と同じ事になるだらうと思ふ。

七、宗教を排斥する道德

又道德が宗教を無視するならば、其根柢が淺薄になつて來る譯てある、宗教を無視したる道德は、必ず生命の問題を捨てゝかゝる、人間の麗はしい精神的の價値を認めない、死んて居ると生きて居るとの間の區別が立たぬ、故に道德も生命の問題に到達しなければならぬ事になる、之に就て詳しく說明する時間がないのてありまして、たゞ私の考を申上げて置くのてある。殿りに例を擧げて言ふならば儒教の中から天道と明德とを取り除いて仕舞つたならば、儒教の倫理の根據は分らなくなつて來る、天道もなければ明德もないと云ふ事になれば、儒教の依つて立つ所はなくなる、そんな實例は幾らても擧げる事が出來るが、面倒な問題になるから省略して置いて更に角宗教を無視する時にはどうしても崇高なる文明は起らないと思ふ、今日の情勢ては宗教から離れたる文明は、段々墮落の傾向を取つて居るやうに思はれるのてある。そこて精神的文化は人類の文明を構成する一大要素てあるとして、其精神的文化の中に哲學と關係を取り、道德と關係を取り、文藝と關係を取り、そうして又獨立的にも必要を有つて居るのが宗教てあるならば、此精神文化の中軸を爲すものは宗教てあると言つてよい。

八、宗教に來らざる文藝

人世は物質のみてはいかぬ、必ず精神生活が必要

てある、然らば精神的生活と云ふものは何であるかと云ふに、それは淨瑠璃を語つて居るのも精神生活であるが、瞬間の快樂を求むるので、デヽンと言つて居る間は、其所に精神生活が起つて居るけれども、それが濟んで仕舞へば、精神に悅樂は無くなる、何處迄も精神に力を與へ、精神に滿足を與へて行くには先きに申した通り、之を學問なり道德なり文藝なり宗教なりに求めなければならぬ、文藝の一部分に淨瑠璃は加へらるゝけれども、瞬間の解脫であつて駄目である、現代人は精神生活の聲を大にして居るけれども、其精神生活の中軸根幹を爲せるものは、何であるかを明かにしないで、瞬間の解脫を以て滿足せんとし、永遠の解脫を求める所に進み得ない、この病見を一掃したならば、直ちに宗教の眞價を諒解する事が出來るのである。

九、人生生活と宗教

そこで先づ左樣に考へて置いて、他面に之を各個人が生活をして行く方から考へて見たならばどうであるのか、即ち物質文明とか精神文明とか云ふものを、客觀的に置かないで、主觀の狀態に戻して考へたならば、どうかと云ふに、矢張同じ事である、吾々は決して物質的生活にのみ滿足するものではない、それが動物と人間との異なる所以であらうと思ふ、唯食つたり飲んだり寢轉んだりして、それで滿足出來るならば、豚も人間も全然同一なものであつて、面倒な理窟を言ふだけヤボである、人間が人間らしき生活を營むと云ふには、どうしても精神的の滿足を得なければならぬ、之を要求する所に人間の價値があるのであります、さうすると其精神生活と云ふ事に就て、一つ考へて見なければならぬ。生活々々と口には叫んで居るけれども、生きて行くには此所に生命がある、食ふから生きて居るのではない、生命があるから生きて居る、生命があるから食ふのである、人間は生命を有つて居るから物を食つて、それを消化して活躍するのである、故に生命が元である。決して胃袋が物を食ふのではなく一種靈妙なるものが身體の中に宿つて生命を有つて居るから、色々のものを食つても、之を消化し之を燃料として活動を起して居るのである。此生命を明かにし、此生命を大切に考へると、それが宗教になるのである。宗教を捨てたと云ふ事になると、自からの生命を忘却した所のものである、それは自動車も持つて居り、大きな邸宅も持つて居り、澤山の着物も持つて居り、澤山の食物も持つて居るだらうけれども、一番肝心な己れの生命を忘却して居るのである

一〇、命の借り物

私は鹽原太助の言ふたと云ふ事を、非常に面白く感じて居る、或金持の親爺が御前は炭などの小賣をして僅かばかりの利益を見て居つたのでは迚もウダツが上らぬぢやないか、俺が金を貸して遣るから、もつと氣の利いた商賣をせんかと云ふと、鹽原太助の答が面白い、私は命と金ばかりは借物は御免だと言つた、どうも妙な事を言ふもので、金は借物で分るけれども、命の借物は御免だと云ふのは、隨分妙な事を言つたと思ふ、併し此言は非常に大きな意味を持つて居るのである、今日の人間は命を質に置いたり、命を借りたりして暮して居るのが澤山ある、さう云ふ人には宗教の必要を解する事が出來ない。

物質的文明に滿足をし、物質的生活に於て滿足の出來る人間は、皆命を質に置いたり命を借物て暮して居るのと同じ事てある。之は非常に大きな問題てある。自分の命を明にし、その大切なる事を知つて、命を永遠に維持する上から考へなければならぬ。己れとは何ぞ、自己の有する此生命、是から出發せよと云ふ事を教へるものは宗教てある。

一一、精神生活の中軸

そこて第二に精神生活の大切なる事を考へると、矢張宗教が非常に必要を持つのて、又先きに申した文明の要素と云ふ事が個人的にも同じ關係を持つて來るのてある、個人的に言ふ場合には吾々の智力の滿足とか意思の滿足とか或は感情の滿足とか云ふ言ひ現し方は違ふが、其智力の滿足の底には學問を要求し、意思の滿足の底には道德を要求し、感情の滿足の底には文藝等を要求しますけれども、其學問と言ひ道德と言ひ文藝と云ふものは、更に進んて行くと先きに申したやうに宗教に迄徹底をしなければ、それ等の滿足が終りを告げないと云ふ事になつて居るのてある。宗教を除いた學問、宗教を除いた道德、宗教を除いた文藝と云ふやうな事も言へるけれども、左樣なる人々、左樣なる社會、左樣なる文明と云ふものは、どう云ふ有樣になつて來るかと云ふと、宗教を離れたる個人の生活は決して幸福なるものてはない、必ず其底には大なる苦悶を藏する、さうして墮落する、社會も亦其通りて、それが爲に種々なる衝突が起り暗黑となり破壞となるのてある。

一二、過去の文明と宗教

私はまだ〳〵今の文明は有り難いと思ふて居る。破壞墮落の淵に向つて居るけれども、未だ其途中てある、家は倒れんとして居るけれども、未だ倒れない、其中に倒れるかも知れないのてある、そこて文明の要素として考へても先きに言ふが如く宗教は頗る重大な要素てあり、個人の生活から考へても精神生活の中軸根幹を爲すの所ものてある、それて自然に宗教と一般文明との關係が明かになつて來ると思ふ、併し之れは唯抽象的に宗教と云ふ言葉を以て、他の文明との關係を言ふたのてありますけれども、實際の所謂成立宗教と申しますか、歷史的に發現したる宗教を見ますと、只今私が申したやうな譯には行つて居らないのてある、即ち此融合して行く原由に亂はないものがある、或は他の一般文明から害物として見られて居るものもある、それは一般文明そのものが誤解を有する爲かも知れない、哲學が無趣味てあつたり、道德が淺薄てあつたり、政治が醜陋てあつたりする爲に、宗教を不要と見たやうな事もあるだらうけれども、又一般文明が誤解したばかりてなく、宗教それ自身にも缺點があつて、哲學的眞理の根據が動搖するとか、道德から批判されると、反道德的の教化になつて居るとか、色々の弱點を持つて居るのがある。それが爲に宗教と一般文明とか融合せなかつた、即ち南方に咎があつたと云ふ事が此永い人類の歷史を捲ふて居るのは事實てありませんか、吾々が有する所の三千年若くは二千年の此東西文明と稱するものは、時間は相當に永いけれども、併し能く考へて見ると、さう大した者てもないやうに思はれる、偉い所もあるけれども偉くない所もあるやうてある、一の例を擧げて言ふならば善良なる

部分が相協力して夫は夫として能く働き、妻は妻として能く助けて互に融合し協力して行く事は非常に善い事である、併し之れが両方共に大きな個性の缺點があり、夫にも缺點があり妻にも缺點があり両方共に始末の惡い人間が寄つて居つたとしたならば、到底理想の家庭を造る事は出來ない、假りに一方が善くても一方が惡ければ旨く行かない、夫が善良であつても妻が性癖を有つて居つたらばいけない、妻が善良でも夫が性癖を有つて居つたならば矢張いけない、此二つが善い具合に合して、夫は夫として妻は妻として善かつたならば家庭は理想的になるのであります、之と同じやうに文明一般の事柄と高遠なる理想的宗教とが融合して、王法と佛法とが冥合するやうに實現されたならば眞に理想的の文明が其所に活躍するのであります。

一三、理想的文明の建設

そこで之は私の希望であるが從來の文明を尊重すると云ふ事は無論必要であり大切ではあるが、其文明の中に若し失敗の點があつたならば其點を除いて、さうして所謂眞の立正安國の春を迎へると言ひますか、佛國を地上に建設すると申しますか、理想的なる文明を建設する事が、吾々の努力の目的であつて、政治と言ひ教育と言ひ宗教と言ひ其他の事は唯區分しただけであつて、人類の有する所の目的を統一的に言ひ現はしたならば唯だ理想的文明を建設するより外はないのである。其理想的文明の中には二大要素として一般文明と此高遠なる佛教とが握手しなければならぬ關係を持つのである。其事を此處に少しく申上げて見たいと思ふ。

一四、佛教の本質的研究

佛教傳播の歴史に就て考へれば、それは種々なる缺點を持つて居ると思ふ、色々の宗派には據所もあるけれども大抵は弊害が伴ふ、一二を言ひますと華嚴宗が與つて哲學のやうな事を言つたけれども、それが通用しない哲學であるから、奈良の大佛がどうなつたかと言へば、宗教でもなければ、哲學でもなければ、文藝でもない、頗る妙なものである。釋迦如來の建てた佛教はあゝ云ふものではなかつたと私は信じて居る、先づ佛教の本質的研究として、暫く歴史的の混雜を取除いて研究すれば玆に新らしき天地が開かれる、それには幸ひ經典が現存して居る、日本の佛教は朝鮮の王様が日本の欽明天皇の時に經文を献上したのが始めてゝ、それが一冊も蝕が食はずにある、勿論其中には披けて見ない御經もある、七千卷と云ふのは唯冊數だけを數へたのである、此長い歴史の間には坊主も澤山居たのだから誰か見たのだらうと思ふが見ない御經が澤山ある、それは確かな事である、故に私は今後佛教は新しき研究に依つて非常に開發進展をするものだと信じて居る、是が十分に咀嚼されて十分に應用されたならば、非常に役立つ所があるのであるけれども、洵に殘念ながら披けて見ないのである、披けて見れば現代及將來の力となり光となるものが、此中に包藏されて居る、日本の先生達と云ふものは科學の本や何かは大體見たでせうが佛教の事は能く見ない、坊さんでさへ見ないのだから世間の學者が見ないのは無理もないが、兎に角見ない、見ないから知らない、今日本當に佛教を研究する者が、少ないのは如何にも慨嘆に

堪へない事である、佛教が我國に渡來して千三百七十餘年の歳月を經て居る、日蓮聖人や傳教大師のやうな偉い人も出たけれども、今日に於ては世人から遠ざかる事數千里である、佛樣の精神に適ふたものは五百人に一人或は千人に一人位であると思ふ　もつと〳〵普遍的に本當の釋迦如來の精神を一般の民衆に奉戴せしめなければならぬと思ふ。

一五、釋尊と轉輪聖王

そこで少しく釋迦如來の理想を御話申上げる、それは釋迦如來は今の所謂宗派に屬するやうな人ではないのである、即ち此理想の文明を建設する指導者を以て任じた人である、釋迦は生れた時分から常人とは違つて居つたのである、悉達太子が御生れになつた時に大勢の人相見が集つて、人相を見た時に、誰も後も皆聲を揃へて、總ての善き相を備へた實に完全なる方が生れたと言つて居る、家に在れば轉輪聖王とならんと云ふ事を言つて居る、此家に在つて迦毘羅衛城の王となつたならば理想的の轉輪聖王とならんと云ふのは、其所らの詰らないへつぽこ宗教家になると云ふのではない、文明を指導する所の轉輪聖王となると云ふのである、所がそれは出家して佛になつたから商賣換をしたのかと考へる人があるが、決してさうではない、天竺に於て出家すると云ふ事は、國の風俗であつて、誰でも皆出家するのである、或年頃の人が學問修業に行くやうなものである、所が多くの人は學問の修業に行つても餘り理解出來ぬから家へ歸つて商賣をして居るのである、それが悉達太子はずば抜けて仕舞つたので偉大なる宗教を開いたので、出戻りにはならなかつたのであ

る、それで釋迦が成道した以後に於て釋迦一族の人達が釋尊を迎へに行つた事がある、さうして釋尊に向つて、あなたは家へ歸つて王樣となつて理想の政治を行つて貰ひたいと言ふ事を言つた、さうして尙ほ申すには「正に轉輪聖王となつて四天下を領し給ふべし」……轉輪聖王と云ふのは理想の王樣でありまして、正しき教を中心にし道德を中心にして政治を行ひ、さうして武力が之に伴ふのである、勿論武力と申しても單なる兵力主義ではない、惡い者があつて天下を亂さんとする時には、それを膺懲するだけの武力を備へて居る者が轉輪聖王である。我國の皇室の御威德のやうなもので、それを轉輪聖王の正法治國と稱して居る、さうして此力に依つて世界を統一するのである、其統一と云ふ事は武力の統一とか侵略の統一とかではない、高遠なる文明を建設してそれに依つて世界の文化を指導する所の倫理的統一、文化的統一であります。それを轉輪聖王は理想として居るので、其場合に妨げをするものがあれば武力を以て之を膺懲すると云ふのである。釋迦如來は迎への來た時に何と答へたかと云ふと「吾は今當に是れ王の身なり名けて法王と云ふ」と言つた、詰り「自分は今家に歸つて轉輪聖王にならないでも此儘ちやんと法王であると言はれたのである、法王と云ふのはどう云ふ意味であるかと云ふに、之は羅馬法王などゝは違ふので教を以て天下を教化する上に於て何人をも領率し終る所の力を持ち、世人の文化を指導し人類永遠の幸福を保護するものを、法王と稱して居るのである。日本の聖德太子の御考が此處にあつたと思ふ、それ故に攝政の御位に在つて生涯天皇になられなかつたものと私は考へる。

一六、勝義諦と世俗諦

そこで之は仁王經と云ふ御經であるが、此仁王經にも矢張王法の事がある、日本の皇室の如きは即ち仁王であります、其仁王經に王法佛法の事を說いて居るが、王法と云ふは此場合には正法と言つても宜い、波斯匿王と云ふ王樣が佛に尋ねて言ふには「勝義諦の中に世俗諦ありや」と此勝義諦と云ふのは佛法を言ふので深遠なる意味から起つて居る、又世俗諦と云ふのは一般の文化を言ふので、勝義諦即ち佛法の中に世俗諦即ち世間の文明を包括して居るかどうか、世間の文明と佛教は別なものかと云ふ事を波斯匿王が尋ねたのである、釋尊は此勝義諦の中に世俗諦ありや否との尋に對して「二諦一にあらず」と言はれた、勝義諦と世俗諦即ち佛法と王法は唯一つと云ふべきではない、其領域が違つて居る、王法は王法の限界があり、佛法は佛法の限界があつて政教を混亂してはいけない、政治と佛教とが混淆して羅馬法王が羅馬を倒して、さうして教會政治を布いたやうに、政治と宗教を混亂して仕舞つてはいけない、だから釋迦の理想から言へば二諦一にあらず、勝義諦は勝義諦、世俗諦は世俗諦でちやんと本領がある、「一二に了達すれば二諦即ち一なり」、之は面白い所で、世間と佛教とは實に微妙な關係があるのでありまして、一たるべき點と二たるべき點とを圓滿に達觀すれば、二諦は即ち一に歸するものである、「勝義諦の中に世俗諦ありや。二諦一にあらず、一二を了達すれば二諦即ち一なり」、之は非常に大事な點である。

一七、佛教の調節的精神

それから佛教に於ては親の恩を教へ、國王の恩を教へると同時に社會の恩を教へる、又もう一つ天地の恩を教へて居る。佛教と言へば唯佛陀の前に坐つて信心する事だけだと思ふのは、御經の一卷をも見ない人の言ふ事であらうと思ふ。世の文明をして片寄らないやうに調節し導いて行くのが佛教である。世の中には婆羅門教のやうな宗教があり、さうして片寄つた所の政治、片寄つた所の道德、片寄つた所の社會現象が澤山あるから、そこで色々さう云ふ不純なる文明を改善して、文明の要素を整へつつ大いに開發進展せしめんとする所のものが釋迦の運動であつたのである。それ故に釋迦の下に集まる者を是れば印度の十六大國の王を始めとし、當時の學者、宗教家、或は當時の人物と云ふものが、皆釋迦の會下に集つて、其教を信奉したのである。それ故に釋迦如來は國家に對しても非常に能く考へて居つたのである。儒教やバイブルよりも。佛教の方が餘程國家意識に就ては、考が整ふて居ると思ふ。法華經の如きは世間の道德、世間の政治、世間の經濟、人類の生活、總てが佛教と一致するものであり、又それを助け爲すものでなければ眞の佛教でないと云ふ事を明かに說いて居る、斯の如くにして宗派的の佛教には種々なる弊害が伴ふて居りませうけれども佛教の本質の研究として考へたならば、今日及び將來に對して佛教の貢獻すべき所は多くあるやうに考へるのであります。

一八、結論

さうして一國の人心を教化して行くには只其時に與り其時に頽たれ行く學說では駄目である。一人一己の考がどれ程善いとも駄目であつて、どうしても永遠に權威を以て民心を指導して行く所の佛教の如きものを押立てゝ行かなければならぬ。曩きにも申す通り政治は無論大事である、一日も政治なかる可からず、併ながら政治は其時々の時勢の問題に於て、人心を鼓舞作興して行くものであり、佛教は永遠に人心を指導して行くものであるから、兩者相俟つて併行し融合し、協力しなければならぬ。さうてなかつたならば到底憲法の精華を萬全に達成する事は出來まいと思ふのであります。尙ほ私の講話は更に申述べたい點もありましたが、後藤閣下が御出になつたさうてありますから、今日はこれで止めます。（完）

日本文化と外國關係

文學博士　姉崎正治

（法華三聖諸恩會に於て、文責在記者）

今日この會で申上げたいと考へて居りました事柄は可なり色々の方面に亘るのてありますが、風邪を引きまして聲が思ふやうに出ないのて、なまじッかに色々な方面を申上げるより、極めて簡單に項目だけを申上げて置かうと思ひます。本年の今までに三聖に關して私が多少研究を遂げた事、並に感想は、或は著書に、或は講演に、世に公に致しましたから、既に御覽下さつた方も中にはあるだらうと思ひます故に、幾分重複する點もあらうかと思ひます、其邊は幾重にも御容赦を願つて置きます。

只今宮原氏が自分が日蓮聖人に歸依するやうになつたのは姉崎の著書に依つたので、常に姉崎に感謝して居ると言はれましたが、若し私に感謝されるならば、私があれだけの書物ても書き得たのは日蓮聖人があつたからてあります、併しもう一ッ考へますれば、日蓮聖人が出られたのは聖人一人が勝手に出られたのてはない、宇宙の大生命が東西古今到る處に流れ〳〵て己まず、時に隨ひ事に應じ、さうして人間の靈性を發揮し、宇宙の大道を代表して出る、その大きな生命が不滅てあるといふ證據であらうと思ふ、今この三聖の事を一々申上げるよりも、日本の佛教の中に大略二ッの大きな流れがあり、同時にそれが人間の天性に、やはりいつも二ッの大きな流があるといふことを第一に申上げたい。

平安朝時代は朝法華夕念佛といふことがあります、これはなか〳〵流行つたやり方て、朝は、この頃はまだ題目を唱へる風習はありませぬが、法華經を誦む、序品て釋尊が禪定から覺めて東方萬八千の世界を照す、無限の光明をもつて東方の世界を照される、それから順々と方便品に入つて說法が始まる、法華經もその點から申せば朝日の心持てあります、それ故に朝法華といふことは時の調子だけて申しても能く似つかつて居る、これから將に來らんとするもの、熱望の心てある。それと丁度反對なのは夕念佛てある、日の暮は必ずしも靜かと云えない、この邊は電事て騷がしいやうてすけれども、靜かな處へ行けば、夕暮の鐘につれて靜かに鉦を叩いて南無阿彌陀佛といふ、その方が日の暮には宜い、ステ、コドン〳〵よりもやはり氣分が適つて居るかと思ふ、さうしてそれは偶然てはない、念佛即ち西方淨土の阿彌陀佛を念ずる、その西方淨土は阿彌陀佛が疾ッくの昔にチャンと造り上げて、末法罪惡の衆生の爲にこ

しらえて置かれた、我々はそれを拜みさへすれば向ふが其處へ引入れて呉れる、この點をすつかり有難がつて、それを芝居にやつて、若い者が甘ッたるい涙を流して居るやうてありますが、人間にはさういふ所に頼寄る心があるものて、これは强ち排斥すべきてはないと思ふ、丁度子供が、無邪氣な子供が怖い事があればお母ッさんと云つて飛付く心持、併し兎に角あの宗教ては四十八願に依つてチャンと淨土が出來上つて居る、我々はその淨土へ行つて朝から晩まて——淨土にもやはり夜も晝もあるやうてありますが、佛樣の顔を見てお說教を聽き、有難い事ばかり聽いて居るのだといふことて、時々は四方の國へ遍歷經行と云つて歩き廻つて來るが、又歸つて來る、同じことを繰返す、要するに何も彼もがチャンと出來上つて居る、その西方淨土に行きたいと思うて、さうして佛に頼つてかゝる心てある。この二つが佛教の中に印度から日本に流れて、今日まて尙ほ流れて居ります、否、佛教だけてはない、古今東西のいろ〳〵の歷史に於て、人間の心持、氣分、信仰、思想の趣を調査して見ますると、種々錯雜した分目色合はありますが、若し大別するならこの二つの心に分け得ると思ふ、一つは要するに將來を望んてその理想を成就し、その理想成就の爲に一身を捧げて活動する心てある、斯の如き精神ては理想はまだ出來上つたものてはない、我々がとも〳〵に造り上ぐべき理想てある、然しそれが法華經ても見方に依つてはどちらにてもなるのてあります、平安朝の人々が見た法華經は有難い御法として、何かやはり出來上つた極樂淨土のやうに思ひ、その出來上つた法華經の精神をそれを仰ぎ見て、唯だそれを歎んだのてある、佛の說法を聽きその行跡を聽いて、恰も芝居を見ると同じやうに思つて居つたのてあります、多寶塔に佛が現はれる、勸持品の菩薩が誓を立てる、それをやはり芝居を見ると同樣に心得て、今日はお寺の和尙さんの聲が好かつたとか、今日の和尙さんの姿が美かつたとか云つてそれを喜んて居つた、今日ても矢張りさういふ法華信者がありますが、法華經は何てもチャンと出來上つた宇宙最高の理想と見て居るのてある、この經文さへ信じて居れば五萬何千卷のお經を一々讀まなくても宜い、是さへ信じて居れば我事足れりとして、何事てもそこへ行けば具足莊嚴のやうに、宇宙の原理はその中からコロ〳〵出て來るものとして、出來上つたものとして仰いて居る人も隨分あります、同じ法華經ても見樣に依つてはこれを將來の理想として仰ぐことも出來れば、既に出來上つたものとして棚に上げることも出來る、どちらてもこれは我々自身の心、靈性の活動如何にある問題てある、法華經それ自身の價値の出來上ると同時に、又我々自身のそれに對する態度如何といふ問題てあらうと思ふ。それに對して阿彌陀佛教の方ても大體に於ては既に出來上つた淨土を仰ぐ心てあるし、併しその中からても例へば眞宗の一部分に出て居るが、既に阿彌陀の誓願を仰ぎ、其教に與かるならば、其教に與つて我心が即ち又直ちに衆生を救ふ心となつて働く、即ち阿彌陀如來に對する觀念、感謝の念が我同胞を救ふ心になつて働くといふ方にも考へられるのてある、その點から云へば阿彌陀如來の四十八願は既に出來上つた本願てなく、我々がともに造り上ぐべき本願てあるといふ方の宗教がこの中から出得るのてある、又一部分には出たのてある。が但しそれは見方による問題てあります、今までの成行て見ますれば、大體に於て法華經の系統思想は朝日の思想てある、これから我々が理想を開發し、理想を造り上げやうとする方向の思想を代表し、淨土門即ち阿彌陀佛教は出來上つたものを仰ぎ見て、それに感服し、それに信頼する心を大體代表したものと云つて宜からうと思ふ。

そこて今日我々が記念しまする聖德太子、傳教大

師、並に日蓮聖人、この三聖の佛教觀を見ますると、何れも皆出來上つたものとして仰ぐ方面よりも、これから我々がともどもに造り上げるといふ方に重きを置かれたのである。先程國家といふお話もありましたが、例へば私は一々内容を申上げることは出來ませぬが、聖德太子が殊に重要視された國家觀の中心は此處にあるのである、直心、この菩薩の淨土、我々の心に直き心がある、それを又聖德太子は十七に分けて論じて居られまするが、菩薩の眞心ある處には即ち其處に淨土がある、それが即ち佛の國土である、佛の至上最高の位から云つたならば國といふものはない、併し衆生の立場から云へば業因業果の關係に依つて同じ心の者が相引き相集る、即ち牛は牛連れ馬は馬連れて集つて、そこで善惡共に法界の固まつた團體が出來る、家も出來れば國も出來る、その國を菩薩の心を以てこれを率き、菩薩の心を以てその國政を助けて行く衆生があれば、そこに菩薩の國土、即ち佛の國土が現はれる、その實をどうして擧げるか、それが即ち太子の御一生の信仰であり又宗教であつたのである、それ故に太子が隋の國に使を出された時に、既に能く御承知でありませうが、初めには「日出の國の皇帝日沒の國の皇帝に書を致す」といふ手紙をやつたのである、所が隋の煬帝は不機嫌であつた、それを使に行つた小野妹子の說明した言葉が隋書に出て居るのを見ますと、「海東の菩薩海西の菩薩法を興すと聞いて使を遣はす」この一言實によく盡して居る、聖德太子が小野妹子を隋の朝廷に使に遣はされた目的はヤレ電信だ電話だ軍艦を一艘殖やすの何のといふそんなケチな談判の爲ではない、海の東にはモウ菩薩が出て菩薩の直心を以て國を率ゐて居られる、聞く所に依れば海の西にも共に菩薩の心を以て國を治める皇帝がある、それ故に俱與にその點から云へば同じてはありませぬか、日出の國といひ日沒の國といふ、そんな兩方ケチな

事を言つてブツ〳〵言ふべきものではないといふ意義が自らそこにある、これは只外交の辭令ではない、聖德太子の一生の上に行はれたのはこの菩薩の心を以て菩薩の國土にしやうといふ事業であつたのである、其事業の中心を法華經に置かれたので、さうして夫を助けて今申した菩薩の直心、菩薩の國土の趣意を明かにした維摩經、さうしてその菩薩の直心を如何に佛弟子間に實行するかといふ、その内容を明かにした維摩經を以て助けられたのである、唯、宗教を政治に使つたのではないのである、政治そのものを誠の信仰の光りに依つて照し淨めて、さうして所謂通常いふ意味なら、人間が集つて、制度があつて、刑法とか民法とかいろ〳〵な法律があつて、巡査があつて、この頃はそれに加へて國粹會といふやうなものが飛出すさうですが、それが何をするか知りませぬが、さういふものがヤッと固めて居る國、これも國であります、外に向つて何だか自分の方が力弱いやうな心持がして、兵隊が一人でも多い方が强いやうな心持、軍艦が一つでも多ければ强いやうな心がする、少し脫線しまするが、軍備は相對的のものだといふことを忘れて、一人でも兵隊が多く、一艘でも軍艦が多ければ强くなつたやうに思ふ、子供のやうな國防心を持つてゐる、それも國は國でありませうが、生命の内容、國の眞の生命の内容はさういふ所にあるのでないと思ふ　たとへ一兵であつても、一艘の軍艦であつても、そこに誠の魂があればそれで宜い、誠の魂がなかつたならば如何に百の軍艦があつても、千萬の軍隊があつても、それは何の役にも立たないものである、その根本を衝いて菩薩の直心を以てこの國土を治めやうといふ、玆に聖德太子の根本の主義が備つて居る、それでありますから大國と雖も恐れない、小國と雖も侮らない、朝鮮の小國を慰撫する、支那の當時南北を統一して堂々たる勢のある隋の煬帝に對しても對等の交りを以て

否、たゞ突つ張つて對等をされるのではない、共に菩薩としてともども若し出來るなら握手しやうといふ交りを結ばれた、それが聖德太子の法華經主義から出た國家主義である、たゞ有形の大砲とサーベルとて固める、さういふケチな國ではなかつたのである、尤も聖德太子とて武力を備へられた、併しそれを濫用する人ではなかつたのである。

そこで私は傳敎大師又は日蓮聖人に就いても將來の理想を望むといふ點に於ては同じ事を言へまするが、このあとの二聖は聖德太子の如く直接に政治の衝に當られた人ではない、自ら趣が違ふ、これは申す迄もなからうと思ふ、傳敎大師の事業も種々ありませうが、比叡山を開かれた意味は今後の待設けにある、世末甚だ近きにあり、今は末法に近い時である、その時の待設けといふ意味に於て比叡山の寺堂は東向になつて居る、これ又日出を迎へる心である、たゞ日沒――入日を送つてそれに感服して歎美の聲を放つ心ではないのである、何者の爲に設けられたか、それは傳敎大師御自身が自分に設けなければならぬ世の中になつたと私は考へます、唯併し、傳敎大師に取つて確實なことは所謂末法の時が來た、この時にはあらゆる法、佛敎の種々の主張方法を合一して、さうして末法の時に備へよといふ、この點だけは確かに大師の希望の點であつたことゝ思ひます、その點に於ては戒壇の考其他ありますが、これは嘗て申した事があり、又これに入りますと長くなりますから略して置きます。

日蓮聖人が日出を迎へる心の人であつたこと、これ又殆ど申すまでもなからうと思ふ、生れられた所は日本の東の隅で、當時の考でいへば日本の國の中で一番日の出に近い所に生れた人、さうして其處に成人して、先づ自分の法を說く時には清澄山に登つて、太平洋に昇る朝日を迎へて法を說いた人である、そこで私は特に諸君と共に考へて見たいと思ふ、日蓮聖人はその一生六十年の事業を完成したものと見て居られるかどうかといふと、私は決して日蓮聖人自身の考としては完成したものと見て居られないと思ひます、まだホンの手を着けたまゝだと見て居られるだらうと思ふ、勿論其一生の內だけに就て申さば、佐渡三年の間の流謫に本尊を書現はし觀心本尊鈔を書き殘し、且つ又第二の騷動とも云ふべき即ち龍の口でも首を斬られる、これは魂魄佐渡の國に來りて書き殘すものと言はれた、開目鈔にも說かれた、併しそれ等も一面からいへば序文ではないでせうか、即ち佐渡から歸られて後の身延八年は何のための生活か、自分の仕事の最早終りである、國民共々懺悔をしなければならぬといふことを言つて居られる、私の考は即ちそこにあるのである、何か日蓮聖人の仕事が丁り日本國家の方も若くは國體の方も既に出來上つたものと見る人が今日の世の中にどうも多いやうに思ふ、出來上つてしまつて居るものなら、ば我々はモウ參加する事業はない、それを仰ぎ見て丁度本佛の戒壇西方淨土に向つて日沒鉦を叩いて南無阿彌陀佛を唱へて居ると同じ心持と區別はない、日蓮聖人を信仰し法華經を讃仰する所以は斯の如く出來上つたものとしてそれを仰ぐのではなからうと思ふ、まだ出來ないものがある、端緒は開かれた、芽は出た、それをどうしてこれから成長させるかといふ大きな仕事を我々に殘されて居るのではないか、身延八年は要するに末世の衆生の爲めでない、懺悔滅罪の生活であつた、これに就ても說明を要することはあるやうに思ひますが、或人が私に質問參詰問を寄越されて、日蓮聖人は大聖人だと思ふ、大聖人にして尙ほ懺悔滅罪すべしといふことはとういふ事だ、罪があるから罪を滅ぼさうといふのだらうが、日蓮聖人が懺悔滅罪しやうといふのは抑〻不敬ではないかといふ質問參詰問を寄越された人がある、丁度是と

同じやうな風な考を、人は往々にして國體論に於て、或は天皇に關しても懷かれて居ると思ひます、天皇陛下はすべて萬德を備へさせられる、何事に於ても我々のすべて仰ぐべき標本核心であるとする、大體いふとこれは誰も異論はない、併しそれであるからと云うて既に天皇から下された所はすべて出來上つた完成したものであると觀る見方は、教育勅語の丁度最後の所を邊した見方であります、教育勅語の終りの「朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ厥德ヲ一ニセムコトヲ庶幾フ」といふその勅語の御趣意を邊したものである、我々共々にやつて行かうと仰しやる、既に世の中の事は總て出來上つたものだ、お前達はたゞそれを眞似をするか拜んで居れば宜いとは些とも言うて居られない、共々やらうてはないかと仰せられる玆に菩薩の道があるのである、日蓮聖人の道もそこでないかと思ふ、懺悔滅罪の意味はいろ〳〵出て來ませうが、兎に角我々は個人的にも國民的にも懺悔滅罪の實は擧つて居ないのである、色々なことを言つて、何か氣に入らないことがあるとそれを社會に持つて來て社會の罪だといふ、隨分今まで我々も惡いことをした、それが今報いつゝあることを知らない、人を恨み社會を呪うて居る、我國民としても世界に對して不義不正なことが隨分あるのである、その報いが今所々に報うて來る、さうすると怨言を外に向つて放つ、このケチな根性を破つてどうしても玆に本當の懺悔をやらなければ、外に向つても本當の仕事は出來ないぢやないかと私は思ふ、それでその事は各〻お考がありませうから、私が一々そのことを申上げやうとは思ひませぬ、兎に角日蓮聖人の最後の身延八年の生活は、個人として日蓮聖人自身にも、亦一切衆生の爲めにも、ともども懺悔滅罪の生活である、その懺悔滅罪の生活は何の爲めかといへば、眞の戒壇に衆生の屆くのを待つ爲め、即ち時を待つ爲である、たゞ欠伸をして棚から牡丹餅の落ちて來るのを待つて居るのではない、我々懺悔滅罪をしてともどもに叩き上げる時を待つといふ、意味でなければならぬと思ふ、その意味に於てやはり理想を將來に望んだ人、所謂朝日の心、日出を仰ぐ心の人とぢッと言ふことが出來やうと思ふ、私はその點について外國關係のことを主として申上げたいと思ふのであります、今日は思ふ通りに聲が出ませぬから、これも極く大體だけを申上げます。

（未完）

實學（下）

山根日東

「梅が香や乞食の家も覗かるゝ」どうも世の中は妙なもので、門地の高い生活の豐富な家に生れて、家庭教育學校生活を思ふ存分に仕込れた人が、孝子でありさうなものだが、さう云ふ人は生長するに從ひ、得てして放蕩者が飛出し、貧乏して何等教育を受けぬ眼に一丁字なき者に　却て非常な孝行者が出來る。「家貧ふして孝子出づ」とは浪花節の文句のみではない、適當な金言で噛みしめれば噛みしむるほど美味が出て來る。

「僧侶とは何ぞや」との問を小學校の先生がその生徒に課した處が、殆んど七八分迄「お葬式に綺麗な衣服を着てお經を讀むもの」との答案を得たと或新聞で見た事がある。僧侶の多くは斯樣に世間から誤認され、從つて佛教そのものをも佛陀世尊をも輕視されるとは、如何にもなさけない次第で、是は畢竟僧侶が教義信條の宣傳と云ふ本務を等閑にして、附

帶條件たる教式儀禮にのみ偏傾した弊害と、今一つはその宣傳が動もすれば空理空論に走りて　兎角實社會と沒交渉の事ばかり誤記り、從つて何等共鳴がないので、是は馬鹿らしい寧ろ鼻の下の喰殿建立が大事と、衣食の中に道念なしとの狀態となつたのである。何も現代の僧侶だつて、さう馬鹿にしたものではない、元來相當の教育が無かつたなら、一ヶ寺の住職權は獲得せられぬ筈で、普通の人間よりも劣等人種だと云ふ扱ひを受けべきものではない、寧ろ有體に云へば、僧侶は普通の常識教育を受けた上に專門の宗學を仕込まれた身の上で、中々偉磊のであるべき筈だ、それが到る處侮蔑の冷遇を受けるのは、畢竟日蓮聖人の所謂「活命のはかりごと」に捕へられ、生活問題にのみ沒頭して折角學び得た學藝技能を實學的に活用されないで、棚牡丹主義を夢み花より團子と轉げた結果に外ならない。

又在家の人も餘りに偏狹で、僧侶の鎧甲妻ないのを難難策勵するのはよいが、坊主がにくけりや袈裟までと、佛教そのものをも輕視するとは沙汰の限りで、由來佛陀の教示からは斯んな生ぬるひ弟子旦那が出るべき筋合のものでなく、潑溂として活ける奉仕者の簇出すべき筈なのである。少し談して見ませうが、佛陀が菩提樹下で正覺を成ぜられた當時、自己は清く高く大きく天地と一如した尊貴なものであるが、國民は餘りに小さく低く混濁に充ちて居る、さし當り此世の中に大法宣傳と出掛た處が、到底距離が餘りに遠すぎて駄目だらう、よさうかしらと考へられた、而して徐ろに眼を開いて見ると、目前に蓮の華が開いて居る、眞に清淨な氣高い品のよい愛らしい花である、おまけに何とも云へぬよい香氣が

芬々として鼻を衝て來る、穢濁極まる池の中から斯くも綺麗な花が咲く、泥の中から出て泥に染みて居ないで　高潔とも上品とも何とも形容の仕方がない、ア、此處だ。世の中は如何にも亂れて居る、人類は如何にも俗惡だ、けれども此俗惡極まる人類の心の底のどん底には一點微妙の本性がある、それは極めて高潔なもので泥の中から出た蓮華が綺麗な花を開き香氣馥郁たる如く、人類もその俗臭紛々たる當體に於て心の底の本心を啓發してやつたならばと考へられた、法華に「淤泥於人華」とあるのは此處の事だ。日蓮聖人が當體蓮華と活釋されたのは此問題なのだ。

夫から經に觀樹亦經行とある通り、徐ろに前方に歩を進められた、處が大きな池があつて堤防が破壞して居る。水は溜れ切て僅かの氷溜りに鮒、鯉、鰻、鯰その他雜多の魚が何れも半死半生の爲體、如何にも悲然の至りである。此態を觀て考へられた、國家と國民との關係も此通りで、統治權に動搖を來せば堤防の破壞と同樣、如何に被治者が四の五のと理窟を捏ねても、秩序は忽ちに破壞されて水に離れた魚の如く、生命も財産も何のその喰き〳〵死滅を待つの外はない。要するに國民に國家擁護の感念乏しきは自己の存在を尊ばない事になる、統治者も亦國民愛撫の精神に乏しく惡政を施たが最後、忽ち反叛謀叛さては他國の侮蔑襲擊を受くる事となる、此關係を會得さすのが何よりも肝要と、さてこそ正法治國の大德教をば建設されたのである。最勝王經と云ひ守護國界經と云ひ、仁王經と云ひ經文の題號からがちやんと其意味を表示してるてはないか。日蓮聖人一生六十年の活動も立正安國論一卷に終始してると

謂へるので、鎌倉の辻説法から池上御臨終の最後の説法迄も安國論の御講演であつた。佛教が實社會と沒交渉などゝ夫は全く習ひそこれの傍系的各宗團の所爲で、實學を尊ぶ佛教正系の日蓮主義は左樣なものでは決してない、「治生産業皆順正法」は法華の表看板で、「先づ國家を祈りて須らく佛法を立つべし」「宮仕へを法華經と思召せ」　なぞ、　日蓮聖人の活ける教示は餘り多すぎるほどある、むしろ御遺文全篇がそれなのである。

活きた學同は活きた材料から幾何でも取り得らるゝので、書籍と首ッ引をしたり教科書と組打を仕てる方には、存外獲物は尠ないのである　併し注意すべき點は其材料だが、開處に標準と云ふものが必要で、たゞ夢闇矢鱈に取りさへすればよいとは行かない、物の判斷を誤ると大變が出來する。同じ水飴を見ても、盜錯は斯奴よいものを見付けた、さし詰之を斯ふ入口の敷居に流し込むと、戸を開けても音がしない、細工は流々仕上を御覽じろと竊盜に惡用したが、之に反して親孝行の柳下恵は、年齢をめした母者人は齒が惡ひから硬い物は咀嚼にくひ、此飴は柔かくて而も滋養に富んで居るからと購めて母に供し、之は美味と母の嬉しがらるゝ慈顏に接して、又なく悦んだとある。同じ材料でも用い樣で斯く結果に天地の懸隔を惹起すから、此點よく〳〵注意しなければならぬ、マー何の事はない釋尊日蓮聖人等聖賢君子の芳躅を模範として、「山水の清氣を得て天地の大觀を極む」底の修養が肝要ぢや。大聖人の御遺文に

一入再入の紅は染むるに依りて色をまし、千顆萬顆の珠は磨くによりて光を增す。

と云ふ妙句があるが、全く以てそれに違いない、活きた材料を取り來りて活きた學問をどし〳〵修むべきである。

記事

各地の思想戰

京都六月活動史　六月一日於本山國講會修行後講演「日蓮上人の教義」土持真雄師

同日夜健兒會例會先月決議せし講論會開會第一回の試としては頗る好成績なりき時間の都合上男子部のみ、久世、高田、有田、金光、岡田の各會員、終りて有田會長の日親上人の一代記詳說ありたり。

六日夜健兒會例會「むすび先生」山田第三郎主事。「鷄鳥大將の廿年時代」小林啓善君。「二人の旅行」立命館大學二木嘉次君。

終りて健兒會發展策につき各講師役員に意見の交換あり十時半閉會す△八日塔中、成就院に於て護正婦人會例會「人事を盡す」有田安道師△十一日健兒會例會「日蓮上人御傳」土持副會長「忠君愛國」小林啓善君「金の鈴」豐田通泰主事△十三日於本山宗祖會修行後講演△「法華の生活」豐田通泰師△十六日健兒會例會「蛙の敵打」山田主事「人生」林玉光君「御直師樣より得たる武勇の教」土持副會長△同日午後二時妙滿寺塔中法光院にて婦人會例會「正法護持」豐田通泰師△十九日夜於本山管長祝下の御講演、例年七、八兩月は御休講につき少なくとも六、七十日間は祝下の御慈言に接する能はず振つて來聽ありたき旨數日前より各師奮闘のもとに護苦方法に萬心大々的活動をなす當日午後七時半健兒會員男女數十名の合唱後「閉會の辭」有田安道師「眞書要文講義」管長木夏星祝下「閉會の辭」土持真雄師。

來會者既に六時頃より山内に集まり來りて開會を待つ總計三百數十名△廿一日午後七時半健兒會例會「眞の力」小林啓善君「イソップの一節」二木陽造君△廿六日夜健兒會例會「堤の穴より」林玉光君「日本人の本分を忘れざりし滿洲お花」小林啓善君「イソップの一節」二木陽造君△廿八日於本山國山會修行後講演「威德の直道」萩原本山部長。

東京の奮戰　品川では月次十二日には妙國寺に、第一土曜には本榮寺に小林文學士の開目抄講義、妙蓮寺は十八日に夾親會、二十七日には本光寺に立正安國講演がある。更に妙蓮寺では毎日利用の屋外講壇を門前に開始して社會教化の呼びをする。

三河島に孤身奮闘して居る青年僧泉谷明光君は期年ならずして會堂を新築して月次二回の公開講演をして居る六月二十三日は笹川僧正の「日蓮主義と國民性」といふ講演があり聽衆八十名非常の盛會であつた。淺草吉野町の常福寺は形勢の場所である月次一回の講演を公開した七月一日は高木布教師笹川僧正の講演で今の處聽衆は少ないが有望である。

本成寺講演　△六月十五日本成寺婦人會「佛土所感」原田日勇△十六日同信會「人の眞價値」原田日勇△二十四日、五十日已上の早魃にて農家は勿論一般井水川水の枯渇に依り飲料水の缺乏に苦しむに至る故に向ふ三日間の雨乞大祈念を爲す佛天の慈悲空しからず即日の晩刻より沛然として三日間の降雨に潤ひ一同漸く生活の安定を得ると共に信念を增進す「測於人事」原田日勇△二十八日天測修養會

「所懸」藤原武「犠牲の精神」原田日與。

神戸通信　神戸市教所信徒慧代辻俊泰氏息女捷子は永々病氣の處六月四日終に長逝す。六日午後四時より野口權大僧正大導師、熊井本光師副導師として、大阪の上田繁路の中川、吉永、明石の川崎、大阪の京藤の諸師、また特に萩原本山部長金列せられ之を葬送す、葬列數丁に亘る、常長祝下は特に弔詞を賜ひ、岡山の能仁、和氣の原田照上人を始め弔詞弔電多數を寄せられ故人死後の榮を慰められつゝ式を終る。△廿一日午後零時半。三菱電機製作所「關民の過路」△廿二日零時半三菱内燃機製作所「釋迦傳の一班」△同日三時半造船所「時勢と佛教」△廿三日四時半神戸製鋼所「國民の進路」△同日夜湊東倶樂部にて「日蓮主義綱要」講員△廿四日零時半三菱造船所「釋迦傳の一班」△同日四時半神戸製鋼所「釋迦傳の一班」以上本多祝下御講演。

東金コドモ會設立　本町兒童會は數年前より常より話題に登り居りしが漸く去月發起人會を開き六月四日其の發會式を擧行せり式は新義法要に始まり國歌（君が代）教育勅語（中村智正拜讀）開會辭（小川莊三郎氏）祝辭（片岡盛助）講話（長崎言導）兒童拾數名の童謡及童話御伽話中村智正、外野日、石井の諸師にて會員申込者三百四拾餘名極めて盛會にて宗歌（立派る）にて目出度閉會せり自後第一第三日曜に開會とのことなり

金澤戰報　六月三日午後八時於別所氏宅「念佛無問論」石橋會章師△六日午後八時於松永氏宅「法華經の得益觀」本郷常次郎氏「本佛と本法」窪田純榮師△七日午後八時於島村氏宅「法華經の道德觀」本郷常次郎氏△十一日午後八時於金石町劇場壽座思想問題大講演會、「現代生活と日蓮主義」本郷常次郎氏。聽衆金石警察署長外智識階級三百餘名△十三日午後八時於辻原氏宅「本佛と吾等」本郷常次郎氏△十六日於匹田氏宅「法華經の利益」本郷常次郎氏、「佛子の自覺」石橋會章師△十八日同於宮崎氏宅「法華經の眞理觀」本郷常次郎氏△二十日午後八時於富士登氏宅「法華經の宇宙觀」本郷常次郎氏、「佛子の自覺」（續）石橋會章師△二十二日午後三時於本長寺「菩薩行」本郷常次郎氏「十章鈔の一節」窪田純榮師△二十三日午後八時於北川氏宅「佛教信仰の價値」本郷常次郎氏△廿六日午後八時於本長寺天晴會講演「法華經方便品概觀」窪田純榮師、「念佛無問論結論」石橋會章師、「法華經の宗教哲學」本郷常次郎氏。

青谷支部　四月七日青谷町統一聞支部にて講演「日蓮聖人教義大要其一」富田日進△八日松崎本立寺にて聖業團例月講演「日蓮聖人傳其三」富田日進△十八日松崎立木彌一宅にて法話「正しき信念」富田日進△五月十二日青谷町統一聞支部例會「日蓮主義大要其二」富田日進「一念三千論」中島孝治△十四日松崎本立寺にて「亡びざる悅び」富田日進△六月一日市橋宅にて法話「日蓮聖人傳其一」富田日進△六日東郷村誕德寺にて、本郷、松崎、舍人、花見の四ケ村學校生徒三百餘名の爲に法話「菩薩行其一」富田日進△廿一日松崎、本立寺にて聖業團例月會「日蓮聖人傳其四」富田日進。

大僧正本多日生師講述

法華經要文講義

本多日生猊下著書一覽

○法華經の心髓　金壹圓六拾錢
○日蓮主義初步　金七拾錢
○日蓮主義　金壹圓五拾錢
○修養と日蓮主義　金壹圓五拾錢（品切れ）
○國民道德と日蓮主義　金壹圓五拾錢
○日蓮聖人正傳　金貳圓貳拾錢
○日蓮主義綱要　金貳圓貳拾錢（品切れ）
○日蓮聖人の感激　金貳圓貳拾錢（品切れ）
○日蓮主義の運用　金貳圓五拾錢
○東洋文明の權威　金貳圓貳拾錢
○國民教化　金貳圓貳拾錢
○法幢　金貳圓貳拾錢
○戰士の伴侶　金貳圓貳拾錢
○思想問題の歸結と法華經　金貳圓
○聖訓要義　各卷壹部金貳圓貳拾錢
○開目抄詳解　上卷一部金貳圓八拾錢
○聖語錄　金貳圓八拾錢
○優婆塞戒經通解　金八拾五錢
○大乘本生心地觀經通解　金八拾五錢
以上各送料一部金八錢
○法華經講義　上卷下卷各一部金參圓四拾錢　送料一部金拾八錢
○大藏經要義　一部金參圓八拾錢十一卷忘既刊送料一部金十八錢半年前金送料不要
○法華經要文　並製金參拾錢　上製金五拾錢送料一部金貳錢
○佛教信仰の正統　金壹圓參拾錢郵稅六錢

以上購讀希望の方は左記へ申込まるべし

東京市外品川町妙國寺內
大藏經要義刊行會
振替東京三一五九六番

統一定價

一ヶ年	一冊	金參拾錢
金參圓參拾錢	送料一錢	送料共

廣告料

四分ノ一頁	半頁	一頁
金參圓半	金六圓	金拾圓
詳細は事の		

大正十一年七月廿七日印刷納本
大正十一年八月一日發行（第三百三十一號）

編輯兼發行人　東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地　國友日斌
印刷人　東京市神田區美土代町二丁目一番地　鈴木日雄
印刷所　東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地　三秀舍
發行所　名古屋市中區新榮町四丁目十五番地常德寺內　統一發行所　振替東京五一〇七一番
編輯所　統一編輯所

不許複製

目次

法華三聖……本多日生
日本文化と外國關係（承前）……文學博士　姉崎正治
日蓮主義より見たる無量義經（第三回）……井村日成
我國民性と日蓮主義……武田顯龍
淨土教と厭世思想……森川日修
ようやんとこども……吉田昂生
記事報道……
法華經要文講義（續）……本多日生
那先比丘經通解（續）……本多日生

第廿六年九月號

北海道松前郡福山郷区白神岬
本島燈台建築工事所出張所